

梧桐日本琴をめぐる

平 山 城 児

巻五に八一〇、八一二番の三首を含む、大伴旅人の藤原房前宛書簡と房前の旅人宛返簡とが収められている。両書簡に用いられた語句の出典の考証については既に諸先学による業績の積み重ねがあり、現在では相当な程度まで解明されていると考えてよいだろう。私がここでのべたいのは、そうした出典に関する問題ではない。大伴旅人謹状の冒頭に「梧桐日本琴一面対馬鑓石
山孫枝石」と記されているが、この部分の一語一語の再吟味を行うことによって新たな疑問を提出したいと思うのである。

一、通説の盲点について

今日「梧桐」という文字にアオギリ（アオギリ科）を当てることは常識でもあり通説でもある。「梧桐は今のアヲギリで、琴などに作る桐は現在普通にキリと呼ぶも

の、即ち崗桐と云ふもので、梧桐ではない筈であるが、文学的には漫然と言つたものであらう。」（『私注』）「梧桐は青桐、ここでは単に桐でよい。」（『岩波日本古典文学大系』）「桐に同じ。梧桐は正しくはあおぎりだが、詩文の上では、古くから桐と通用された。」（『小学館日本古典文学全集』）などあり、『注釈』は和名抄の文章を引いたあとに次のように記している。

琴や箏筒や下駄に造るものは今「きり」（こまのはぐさ科）と呼ぶもので、椅桐は今「あをぎり」（あをきり科）とよばれ、別種であるが、ここに椅桐の文字を用ゐたのは次に引用する琴賦に「椅梧」の文字があるので「梧」の方を用ゐたものかと思はれる。しかし李善の注にも引用してゐるやうに毛詩の鄘風、定方中の章に「樹之檟栗、椅桐梓漆、爰伐琴瑟」

とあり、毛伝に「椅、梓属」とあつて琴に作つたのは「椅」であらう。

私も従来はこの通説を漠然と読みすごし、特に深い疑念にとらわれたこともなかったが、さりとて「梧桐日本琴」という字面にはいつもこたわりを感じていた。くりかえすと、今日一般にコトと称している楽器の材料はキリ(ゴマノハグサ科)であるが、「梧桐」と表記した植物にはアオギリ(アオギリ科)をあてるのが今日の常識である。アオギリ製のコトは常識外であるとすると、旅人が「梧桐」と表記したのは旅人の誤記であつたのか、あるいは「梧桐」と書いてもキリ(ゴマノハグサ科)を指すという確実な証拠でもなければ納得できないことになる。

従来のも常識あるいは通説には少くとも二つの盲点があつたと思われる。旅人が房前に贈つた品物は「日本琴」即ち和琴である。今日コトという場合は十三絃の箏を指すのが常識で、その箏の材料はキリ(ゴマノハグサ科)であることも常識である。だから(この「だから」が第一の盲点である)旅人の「日本琴」の材料もキリ(ゴマノハグサ科)であらう。キリ(ゴマノハグサ科)以外の材料を用いてコトが造れるはずがないから、従つて(この「従つて」が第二の盲点である)「日本琴」の材料はキリ(ゴマノハグサ科)であらう。となると、「梧桐」はアオギリ(ア

オギリ科)ではなくてキリ(ゴマノハグサ科)と考えなければならぬ。従来の通説は、おそらく以上のような類推から作り出された仮説にすぎない、ということが私には次第に見えてきた。つまり、通説を成立させている「だから」と「従つて」を一度切り離して、それぞれを別個に検討しなおしてみることが必要なのである。

二、日本琴(和琴)について

奈良時代には、和琴(五絃または六絃)、琴(七絃)、新羅琴(十二絃)、箏(十三絃)、瑟(三十六絃)という五種類のコトが存在したということは、東大寺献物帳に次のような名称が記されているので証明できる。

檜木倭琴 銀平文琴 漆琴 金鏤新羅琴 桐木箏
楸木瑟

これらがそのまま今日まで伝世されたわけではないが、正倉院に現存する御物の中からコト類の名称を拾つてみると、次のようなものが見られる。¹⁾

檜和琴 金銀平文琴 桐木琴 残欠 金泥絵木形新羅琴 金薄輪草形新羅琴 琴瑟類 残材

これらのコト類がどのような材料で造られていたかが当面の問題だが、その点については、林謙三氏の『正倉院楽器の研究』(昭39・6、風間書房)に詳しい報告がある。

同書から要点のみを摘記する。

和琴残欠第一号（北） 槽、小口板、裏板—檜。龍手

—唐木。

和琴残欠第一号（東） 槽—檜。

和琴残欠第二号（北） 「絹索堂」V（北） 槽—檜。

裏板—杉。

和琴残欠第二号（南） 槽—檜。

和琴残欠第二号（東） 槽、裏板—檜。

和琴残欠第三号（東） 槽—桐。

和琴残欠第四号（東） 槽—桐。

和琴裏板（銘「絹索堂」V（北） 檜。

和琴残欠第五号（東） 槽—桐。

和琴裏板第一号（銘「東大寺」V（東） 沢栗。

和琴裏板第二号（東） 檜。

和琴小口板（南） 檜。

和琴槽残材？（南） 檜。

和琴槽残材？（東） 檜。

和琴残欠第六号（東） 黒柿。

この一覧表を見ただけでも、和琴はコトの一種だから、その材料はキリ（ゴマノハグサ科）であるという俗説はただちに崩壊する。正倉院御物を参考にすると俗説は、和琴の材料としてはヒノキが圧倒的に多く、そのほ

かには、キリ（ゴマノハグサ科）やスギや沢栗を用いることもあったといえる。唐木や黒柿などという材料は硬質の木材であるから、「龍手」（本方の足）といった部分には用いられたであろうが、主材料ではない。

本稿では和琴だけが対象であるからほかの楽器の材料を一一詳しく取り上げる必要はないが、コトであるからキリ（ゴマノハグサ科）が材料であろうという通説を反省するために、いくらか材料の例を挙げておきたい。

七絃楽器残欠（銘「東大寺」V（南） 沢栗、檜。

瑟残欠（南） 沢栗。

箏残欠（南・東） 沢栗、桐、花欄、柿。

新羅琴（北） 桐、沢栗、紫檀、黒柿。

琵琶（北・南） 桐、沢栗、楓、紫檀、黄楊木、唐木

黒檀、桑、樺。

阮咸（北・南） 沢栗、桑、紫檀。

篋篥（南） 桐、桑、黒柿。

このように、楽器の共鳴する部分に用いられる軟らかな木材としては、確かにキリ（ゴマノハグサ科）も用いられているが、それをはるかに凌駕する分量で沢栗が使用されていることに気づく。

私はこのような報告に接するまで沢栗という言葉を知らなかった。別の正倉院関係の書物を調べてみると、そ

こにも沢栗は頻りに登場していた。⁽²⁾一つの本には、沢栗は「あぶらざり属」の植物であると記してあった。⁽³⁾ところが、植物図鑑を引いてもサワグリという学名の植物は見あたらない。見あたらないのは当然で、沢栗という名称は俗称であって、特定の植物を指す学名ではないのである。上原敬二氏の『樹木大図説』第一巻(昭和34・9、有明書房)によると、沢栗は次の九種類の植物の異名だそうである。(1)クスギ(ブナ科)、(2)アベマキ(ブナ科)、(3)ホソバガシワ(ブナ科)、(4)フサザクラ(フサザクラ科)、(5)ヤマシバカエデ(カエデ科)、(6)ハリギリ(ウコギ科)、(7)リヨウブ(リヨウブ科)、(8)シオジ(モクセイ科)、(9)コバノトネリコ(モクセイ科)。

別の書物によるとヤチダモ(ヒイラギ科)の異名も沢栗だそうである。このように多くの植物の異名だとすると、正倉院の楽器の材料に沢栗が多く用いられていると記されている、具体的にどの植物を指しているのか見当もつかないということになる。つまり、極端にいえば材料が沢栗だということは、材料が不明だということと同義になってしまうのである。⁽⁴⁾

和琴について、もうひとつの角度からの研究に触れてみたい。近年の考古学上の発見には目ざましいものがあるが、その発掘物の中からコトの遺物を選び、年代的・

形式的に分類して考察した水野正好氏の「琴の誕生とその展開」(『考古学雑誌』昭55・6)はユニークな論文であった。この論文によると、発掘されたコトの実例は、年代的にみると、弥生時代後期から古墳時代を経て白鳳時代・奈良時代に及んでいる。また、形式的にみると板作りのコトと槽作りのコトの二種類に分けられる。板作りのコトというのはただ一枚の長方形あるいは台形の板からなっているコトである。その一方の端に五個または六個の突起が造り出されているのは、そこに五絃の絃が結びつけられていたのである。ただ、その五絃の絃が平行にもう一方の端に達していたのか、あるいは、もう一方の端の一点から五、六個の突起へ向けて放射状に張られていたのかは必ずしも明瞭ではないようである。中には辻田第三号琴のように、長さ八一・五センチというかなり長いものもあるが、板作りのコトは概して小型のものが多く、長さ四一センチから六〇センチほどのものが普通のようなものである。奈良県天理市布留遺跡で発掘された長さ四五センチのものは、「一材の両側縁の両端を削ぎ明確に琴尾、琴央、琴頭を区別している」コトで、「琴身の幅と長さが1:7の比率を示す」優美な形体をもっていることに注目しておきたい。これは奈良時代の遺品のようなものである。槽作りのコトは板作りのコトの下方に簡単

な箱型の共鳴板をはめこんだもので、どちらかというとな板作りの琴よりも大型のものが多く、たとえば辻田一号琴は一四八・四センチの長さである。

これらのコトは和琴とよんでよいようである。これらの材料がなんであったか一々記録されているわけではないが、判明している例を挙げると次のようになる。登呂杉。辻田一号琴―モミ。辻田二号琴―杉。沖ノ島―金銅。沖ノ島のコトはミアチュアであるから別にすると、ここでもスギまたはモミという材料が明らかにされていて、それがキリ(ゴマノハグサ科)ではないことは正倉院の場合と同様で、和琴の材料としてはむしろキリ(ゴマノハグサ科)以外の木材の使用例の方が多かったということを物語っている。

三、梧桐について

岡不崩の『古典草木雑考』(昭10・12、大岡山書店)には中国やわが国の多くの書物からの引用が列挙されているが、これらを参照すると、かえって「梧桐」がいかなる植物であるかを決定できなくなるようである。引用そのものより不崩自身の文章による分析の部分を用用してみる。

本経に桐葉とあるは、即ち白桐にして、上古はこれ

を梧桐といへり。花を先にし葉を後にす、故に爾雅に榮桐といふ。時珍曰、或はこのもの、花ありて実のらずといふは、観察の及ばざるなり。陸璣は椅を以て梧桐と為し、郭璞は榮を以て梧桐と為す、何れも誤なり。又曰、陶注には、桐に四種あり、子なきものを青桐・岡桐となし、子あるものを梧桐・白桐と為す。寇が注には、白桐・岡桐皆子なし。蘇が注には、岡桐を以て油桐と為す。而して賈思勰は、実あつて皮青きものを梧桐と為す。華あつて実のらざるを、白桐と為す、其説陶氏と相反す。今咨訪するに、互に是否あり。

結局のところ、「梧桐」はアオギリ(アオギリ科)であるとするので、不崩の結論は今日の通説と等しいことになる。今日いかなる植物図鑑を開いても「梧桐」にはアオギリ(アオギリ科)をあてているので、その点は問題はない。だが、それがそのまま奈良時代に通用するかどうかというのはまた別問題であろうと私は思う⁽⁵⁾。

ここに別の条件がある。中国においてもわが国においても植物の名称は互いに混用されることが多く、また、同一の植物が場所により時代により何種類もの異なった名前と呼ばれる場合もざらにみられる。いま、『樹木大図説』により、アオギリ、イイギリ、アブラギリ、ハリ

ギリの異名を列挙してみると次のようになる。

アオギリ (アオギリ科)

キリ (万葉集)、アオニヨロリ、フクロソノ、イツサ
キ、イクササ、イツサイサキ、アヤギリ、アオキ
リ、ヤマキリ、アオベラ、ウリノキ、ツシマギリへ
ラ、ビヨクオトン、梧桐、青梧、碧梧、碧梧桐、青
梧桐、梧耳桐、青玉、鳳条

イイギリ (クスドイゲ科)

ナンテンギリ、イヌギリ、ヤマギリ、ノギリ、シマ
ギリ、カタギリ、サワギリ、アヤギリ、ミズギリ、
ミホギリ、アブラギリ、インギリ、イギリ、イト
ウ、椅、椅桐、飯桐、伊比桐

アブラギリ (トウダイグサ科)

ヤマギリ、イヌギリ、エギリ、ドクエ、アブラノ
キ、アブラセン、アブラギ、アブラコシ、ニホンア
ブラギリ、シナアブラギリ、トウギリ、シナギリ、
アラギリ、ミズギリ、エノギリ、ケンギリ、罌子桐

桐油樹、山桐、桐子樹、荏桐、油桐、毒荏、油木、

桐樹、小桐樹、虎子桐、膏桐、剛桐

ハリギリ (ウコギ科)

ヤマキリ、ヤマギリ、イヌギリ、ムネギリ、カツタ
イギリ、タニギリ、刺桐、海桐、薊桐

このように、アオギリ、イイギリ、アブラギリ、ハリ
ギリのいずれをもヤマキリ (またはヤマギリ) と呼んでい
る。また、イイギリ、アブラギリ、ハリギリのいずれを
もイヌギリと呼んでいる。また、イイギリとアブラギリ
はどちらもミズギリ、アオギリとイイギリはどちらもア
ヤギリと呼ばれている。また、イイギリの別名が、なん
とアブラギリなのである。

こうした異名は要するに俗称でもあり方言でもあるか
ら、学問的には無視すべきだという考え方がもしあるな
らば、それこそ否定されなければならない。今日でも植
物の名は土地により、職業により、場合により、それぞ
れふさわしく呼ばれているのであって、学名などは通用
しない。学名は植物学者やほんのひとにぎりの植物愛好
家の間にしか通用しない名称である。今日でもそれが現
実ならば、奈良時代においては、いったいどの程度まで
の厳密性をもってこの問題をおしはかるべきか、私は迷
うのである。

アブラギリという植物を知らない私は、それを確認す
るために小石川植物園へ行った。結局そこにはアブラギ
リがないということが判明したが、アオギリの近くにイ
イギリ、ハリギリの大き木が現存していて、それらと比較
することができたのは有益であった。⁽⁶⁾ キリ (ゴマノハグ

サ科)も含めて、アオギリ、イイギリ、ハリギリの四者は、いずれも十メートルほどになる落葉喬木で、その葉は広く大きい。幹の感じはそれぞれ幾分異なっているが、葉の広い、長大な落葉喬木という点だけをとりえると、むしろよく似ているといえる。キリ(ゴマノハグサ科)も山野に自生するが、どちらかというところ、その材質の特長から使い手があつて、そればかりが栽培されるようになる、それ以外のキリ(ゴマノハグサ科)に似た、山野に自生する樹木をヤマギリとかイヌギリとか呼ぶようになったのではないだろうか。そのヤマギリの中で幹の特に青くてつるりとしたものをアオギリと呼び、若木の頃には大きなとげのあるものをハリギリと呼んだのである。イイギリについて『牧野日本植物図鑑』(昭15・10、北隆館)は、「往昔此葉ニ飯ヲ包メリ故ニ云フ。又一説ニイイギリ既チ椅桐ニテ椅ノ音ヲ長クシタルモノト云フ。漢名 椅(蓋シ誤用)」とある。また、昭和五十五年秋に私が小石川植物園でもとめてきたパンフレット『秋の花だより』にもイイギリの解説があつて、「材は軽く軟かく、箱材、下駄材などにされる。」とある。アブラギリの実物は見ることができなかったが、これも高さ十メートルになる落葉喬木である。かつてはこの種子から桐油を製造したのでアブラギリと呼ぶのである。

さて、和琴の材料には、ヒノキ、スギ、モミ、キリ(ゴマノハグサ科)、沢栗と、さまざまな木材が用いられていたようであるから、「梧桐日本琴」の「梧桐」を簡単にキリ(ゴマノハグサ科)と断定することはさしひかえなければならぬ。「梧桐」はアオギリ(アオギリ科)であつて、アオギリ製の和琴であつた可能性も否定できないのである。しかし、アオギリが果たして和琴の材料として適当なものであつたかどうかという点になると、私には答がない。ただ、正倉院御物に、刻彫梧桐金銀絵長花形合子と称する蓋物がある。長さ三一・九センチ、幅一八・八センチで、複雑な宝相華文を薄肉に浮彫にして彩色をほどこした、精巧な木彫品である。これが真実アオギリから造られたものかどうか、目下のところ証明する手立てはないが、もし、この材料に「梧桐」すなわちアオギリを用いてあると考えられるならば、奈良時代にはアオギリがこのような精巧な木彫品の材料としてふさわしいと認められていたことになる。蓋物と楽器としては全く用途が異なっている。「梧桐日本琴」への類推の根拠となるはずもないが、今日の常識からはむしろ意外な材料である。「梧桐」が細工物に用いられていたという事実があつたのではないか。かりにそれを正しいとすると、やはり今日の常識ではおしはかれない木材が和琴の

材料として使用されているのは事実であるから、「梧桐」すなわちアオギリも用いられてもおかしくはないのではないかと。

『樹木大図説』は齊民要術の文章を引いて、そこに梧桐から樂器が作られたとあるのはキリ(ゴマノハグサ科)と混同したのだろうかと疑いつつも、「中華に梧桐を以て琴瑟に作り、器材とす、上材なり、今鳴桐とて世に良材とす、器に作りて白桐にまされり、四国より出或隱岐より出つ故にシマギリと云」(種樹書)という文章も引用している。

四、対馬結石山について

上結石山は長崎県上県郡上対馬町河内(対馬の北島の北端に近い所)の西にある山。頂上平坦部に烽火台のあとらしいものがあり、防人のあとかという。山麓に文祿役の後、千人塚が築かれた。今、ユイイシ山と呼ぶ。(岩波日本古典文学大系頭注)

この頭注が実際に結石山へ訪れた体験を基礎に書かれたものか否かは知らないが、『津島紀事』(大6・12、津島紀事刊行会)にも『対馬島誌』(昭3・7)にも同様の記述があるので、そうした地誌を参考にしただけでも右の頭注は書けるのである。

筑紫豊氏の『九州万葉散步』(昭37・8、福岡県文化財資料集刊行会)には、結石山へ実際に登った体験が記されている。だが、「八合目ぐらにあたる支峯にたどりついてみると」「両手とも掻き傷だらけ」になり、それ以上無理して昇っても「梧桐の切株の見つかることもあるまい」と断念したとある。犬養孝博士の『万葉の旅』(昭39・7、社会思想社)に結石山を訪ねた記述はない。『九州の万葉』(昭51・3、桜楓社)では、春日和男氏が『対馬島誌』を引用し、結石山を麓から望んだ姿を叙し、「いまは桐の木など全くないようであるから、移植させてはいかがであるうと思う。」と書いている。つまり、春日氏は結石山へは昇っていない。

昭和五十二年五月二十二日、研究休暇を利用して私は博多から対馬へ渡り、同二十五日河内に達した。結石山は海岸からすぐにもち上がっている海拔一八三メートルの山である。麓の古藤家で昇り道の案内を乞うた。頂上に立っている共同のテレビアンテナから一直線に地上へ降りてくる電柱の列があって、保全のためにその両脇だけが木を伐採してある。昇り道といってもそこを昇るよりほかはなかった。一八〇メートル近くを一直線にいきなり昇るので傾斜がきつく、かなり苦しい昇りであった。筑紫氏の記録にもあったようにサルトリイバラが多

い。「八合目」は大げさだが、三分の二位昇った所にやや平らな部分があって大きな岩が露出している。そこが城跡かもしれない。小休止して、そこから五十メートルばかり小さな尾根を通り、再び急傾斜で頂上へ昇る。頂上には三本のテレビアンテナが立っていた。昇ってきた側は全く木がないので、見おろす景色は絶景であった。しかし、北側と西側には灌木がびっしりと茂っていて何も見渡せない。灌木をかきわけて向う側へ出ようと努力してみたが、はい出る隙間もない。そこが本当の頂上であるか確かめようもなかったが、「絶頂ハ地ヲ曳キ平カニシテ」(『津島紀事』)といった趣きはなく、腰のあたりまで生えた藪だらけの狭い空き地があるのみであった。もしそのびっしりと茂った灌木を切り倒したならば、朝鮮半島の方向へむかって、さぞ見事な眺めが展開するであろうと想像はされた。

下山してから古藤家でお茶を御馳走になり、いろいろ話をうかがう。このあたりにキリ(ゴマノハグサ科)の木があるだろうかというのが私が最もたずねたかった質問である。すると、結石山の南麓に古藤家のヒノキの植林があつて、その間に少々キリを植えておいたというお答えがいとも簡単にかえつて来た。確かにそこにキリの木があつた。その後、大河内湾をまわつて対岸の撃方山へ

むかつてゆくと、何本かのキリの木が忘れられたように生えており、入江沿いに美しい紫色の花を咲かせていた。そして、撃方山へ昇る。そこには海上自衛隊の監視哨がある。紹介なしに監視哨へはいれないので途中の尾根へ出る。あいにく薄もやが出ていて朝鮮半島は見えなかったが、天気さえよければ指呼の間に見えるはずである。「頂の所々にレーダーのアンテナが白く反射しているのは、そのかみの烽火台を思わせて面白い。ところで、かの結石山は、紺碧の水を湛えた大河内の入江を隔てて、呼べば答えるところに頂をもたげていた。まことに「さいはて」のいな最前線国境の万葉遺跡にふさわしい景観であつた。」と、『九州の万葉』に書かれているとおりの光景であつた。さて、鰐浦の方へ降りようとしてふと視線を近くにもどすと、なんと目の前にキリ(ゴマノハグサ科)の木が生えていたのである。尾根にせよ、撃方山の頂上近くにキリの木を植えるわけがないから、それは自生のキリであつた。その時の私は、「梧桐」はアオギリではなくキリ(ゴマノハグサ科)であるという通説に従い、なんとかして結石山の山頂かその近くにキリの自生を見たいと願いつつ歩いていたので、その撃方山上のキリはうれしい発見であつた。

古藤家でお借りした阿比留徳勇氏の『歴史上対馬』

(昭43・10、歴史上対馬刊行会)には次のような記述がある。

筆者は郷土クラブの生徒と共にこの山頂に登ること前後三回、附近一帯の調査も完了した。対馬島誌が伝えるように頂上は平である。／山頂より十メートルばかり下った東側の平地に城跡らしい石垣の散乱した一部が露出している。その位置は平でほぼ山頂の広さと同じ面積と考えられる。ここより尾根づたいに東側に石の廓あとがある。／古え防人を置いた所だけに要害の地である。烽火のためであろうか。

この山頂の腐葉土は赤味をおびている。焼けた土であることが看取される。山頂には灌木が茂り眺望はきかない。だがその昔ここで烽火をあげて朝鮮海峡を渡ってくる賊船をしらせ合った。

地元の郷土史家の記述であるから山の状態の叙述はこれが最も信頼のおける記事であると考えられる。注意深くよみ自身の体験をふりかえてみると、どうやら私は頂上に達していたのである。中途の尾根にあった岩場が、阿比留氏の「城跡らしい石垣」なのであろう。「絶頂ハ地ヲ曳キ平カニシテ」などといういかにも広々とした頂上のようなが、私の体験からいうと精々六畳間程度の広さであった。

五、対馬の植生について

『津島紀事』に対馬産植物についてのかなり詳しい記述がある。そこから末尾に桐の字をもつ植物名を拾ってみる。

桐 幾利 大和本草ニ所謂 白桐

梧桐 比義利 或ハ曰ニ唐桐ニ 多宇岐利

荏桐 如ノ字 或曰ニ阿夫良世牟ニ 大和本艸ニ所謂 罌子桐

刺桐 佐伊陀羅 大和本草ニ所謂 海桐

犬桐 和字 或曰ニ胡桃ニ 具留美 大和本艸ニ云白楊

阿於仁与呂利 全上 大和本艸ニ所謂 伊津左幾

陀州指ニ此木ニ謂ニ対馬桐ニ 和漢三才図会云謂ニ梧桐之

一名於青如狼狸

これらに学名をあてはめてみると、桐ニキリ、楨桐ニヒギリ、荏桐ニアブラギリ、刺桐ニハリギリ、阿於仁与呂利ニアオギリとなる。犬桐はクルミかハヤナギだといふから除外してよい。またヒギリはクマツヅラ科の真赤な美しい花をつける木だが、高さ一メートル位の灌木であって、ほかのキリ類のような材木にはならないから、これも除外する。ともかく、これによると、大正初年当

時には、キリ、アブラギリ、ハリギリ、アオギリがすべて対馬に生えていたということになる。

『対馬島誌』から、同様に末尾にキリとつく植物名を拾ってみる。

桐 ひぎり或は(たうぎり) あぶらせん(あぶらぎり)
り) あおによろり(いつさき) 此の木を対馬桐と云ふ。
いいぎり はりぎり

これもほぼ同様だが、「あおによろり」つまりアオギリについて、「此の木を対馬桐と云ふ」という記述は見のがせない。昭和初年度にも、キリ、アブラギリ、アオギリ、イイギリ、ハリギリが対馬に生えていたわけである。

昭和五十二年に対馬へ渡った時、私は厳原町の対馬支庁林業課を訪問し、その年全島に栽培されているキリ(ゴマノハグサ科)の本数をたずねたところ、次のような数値をえた。

三年もの 一二〇〇〇本
二年もの 四〇〇〇本
一年もの 三〇〇〇本
計 一九〇〇〇本

対馬全島に一万九千本のキリが栽培されているという事実は私には驚異であった。当時は「梧桐」≡キリ

(ゴマノハグサ科)と考えるつもりでいたので、この一万九千本のキリの存在は私を勇気づけてくれた。しかし、その後、「梧桐」は必ずしもキリ(ゴマノハグサ科)ではなくてアオギリの可能性も大きく、あるいはアブラギリ、ハリギリ、イイギリも可能性の範囲に入れておく必要もあると考えはじめたので、一万九千本の栽培ギリ、撃方山頂に自生していたキリの存在が、そのまま「梧桐日本琴」の問題の解決に直接には結びつかないと考えるようになった。そのようなわけで、その後の知見も加えて、当時お世話になった林業課の古藤定氏にいくつかの質問を書き送った。以下に示すのが古藤氏の返信の一部である。

一、先生が御来島の五十二年以降はキリの植栽はほとんどありません。
二、先生に申し上げました、一万九〇〇〇本は実際の机上数字ではありませんが、他の先輩の意見をまとめれば、三万本は確実に植えられているという事を最近聞きました。

三、アオギリの自生について。たしかに自生していると思います。多くはありませんが推定することも困難です。ただ点在していること。特に点在が著しい地域もないようです。植栽キリ(三万本を前提に)

に比較しても数百本か千本前後と思われる。

四、アオギリを対馬桐との件。昔はわかりませんが、近年「対馬桐」という言葉は全くききません。ただ「キリ」とは呼ばれており、植栽のアブラギリ（台湾ギリの類）を本県では西海ギリと言っています。

五、アブラギリ自生について。まず自生はないと考えます。（小生私見でなく林業課として……）

六、イイギリも自生してないと考えています。

以上によれば、アオギリが対馬に自生していること、アオギリを対馬では「キリ」と呼んでいることが判明したのである。

六、『体源鈔』の記述あわせて「孫枝」のこと

豊原統秋の『体源鈔』に次のような記述がある。

一、箒のこうの木 旧記に云、塩風にふかれたる日あたりの孫枝をもちいるべきなり。糸は山城の糸をもちいるなり。伊勢国美濃などもよし。甲は対馬國桐第一也。

この文章は「箒」のコトについてのべているので、直接和琴にはあてはまらないが、いろいろと示唆に富んでいる。まず、「塩風にふかれる日あたりの孫枝」とある。

私の自宅近くに桐材店がある。琴（もちろん十三絃の）を作るためのキリ（ゴマノハグサ科）の原木を仕入れ、断裁し、成型し、アク抜きまでの工程をするのである。その主人、北川氏に質問したところ、キリは暖地でぬくぬくと育ったものは木目が荒くて良材とはならない。むしろ天候の厳しい土地で痛めつけられた方が木目がまっぴり上等になる。台湾桐などより会津桐が珍重されるのはそのためであるという話だった。従って「塩風にふかれたる日あたり」に生えていることは、おそらく良材となる条件のひとつであろう。大伴淡等謹状の中に、「余託_ニ遙鳴之崇巒_一。啼_ニ幹九陽之休光_一、長帶_ニ烟霞_一、遣_ニ遙山川之阿_一、遠_ニ望風波_一」という文章があるが、この描写と『体源鈔』の文章が響きあっているような気がするのは妙である。結石山は海岸からじかにそり立っている山であるから、「塩風にふかれたる日あたり」といえば、あまりにも適合しすぎるようでもある。

次に「孫枝」である。従来の注釈書のほとんどはこの語について無関心であったか、ナンセンスな注をつけているだけである。たとえば、『注釈』は次のように注している。

孫枝（*新撰字鏡を引く）その注の如く、梢とか枝から更に出た細枝の意で、幹の側に芽を出すヒコユエ葉とは別

である。しかしこの語も琴譜にあるものをそのまま用ゐたものである。

「梢とか枝から更に出た細枝」を材料にしてコトが作れるものだろうか。それが可能だとしても、これだけでは単なる辞書的説明にすぎない。かりにこの言葉が琴譜からの借用した単語であったとしても、旅人がなぜ贈物の名称である「梧桐日本琴」の下へことさらめかしく「対馬結石山孫枝」と記したかが説明できなければ、それはやはり注のための注でしかない。

旅人がわざわざ「対馬結石山孫枝」と記したのは、自分の贈物が珍重すべき、しかも優秀な材料で作られたということを強調したかったからである。「対馬結石山」は今日でも大陸へむけての最前線である。もし大陸からの侵攻軍が日本へ攻め寄せてきたならば、真先に発見するのが撃方山の烽で、その知らせを受けて後方に伝えるのが結石山の烽であつたのであろう。旅人は大宰帥で、この烽に常駐する防人は旅人の最末端の部下である。すでに往時の威勢はないとはいえ、大伴氏が武門の誉れ高い家柄だということは旅人自身充分に意識していることであつた。

白村江の敗戦以来の恐怖は恐怖として残っていたかもしれないが、奈良時代には朝鮮海峡を越えてくる敵はな

かつたわけであるから、対馬の防人たちは退屈であつただろう。そうした国境守備のつれづれに防人のひとりか「梧桐」の木を見つけて切り出し、あるいは完成品の和琴としたかもしれないが、上司である旅人に奉つた。

「対馬結石山」の「梧桐」で作つた「日本琴」というのは、大宰帥という職にあつた旅人であつたからこそ意味のある珍重すべき品物であつたのである。「甲は対馬国桐第一也」という『体源鈔』の言葉がもし古い伝承を伝えているとすれば、「対馬結石山」産であることとわかることは材料の優秀性を誇示していることにもなるわけである。

さて、「孫枝」の正しい意味をのべなければならぬ。従来の説明として最も適切なものは『全註釈』の注のみであつたと私は思う。『全註釈』は「孫枝は本幹の側から出た枝をいう。」と、まず辞書の説明を行い、次に琴譜の引用をし、次に「キリは、本生の幹を切り、その後から出たものを良材とする。山地に自生するものは、木質が緻密で佳良である。」と記してある。私が北川桐材店の主人にこのことを問いただと、『全註釈』の説明が最も実情にかなつているとのことであつた。つまり、旅人がことさら「孫枝」と記したのは、琴譜との兼ねあいもさることながら、キリにとって「孫枝」が良材であるとい

うことを知った上での注記であったと思うのである。なぜならば、そのようにして「梧桐日本琴」を受けとった房前が返簡に「龍門之恩復厚^{（一）}蓮身之上」と書いているからである。この「龍門」については従来登龍門と解釈する説も有力であったが、枚乗の「七発」などにも用例があるように、「龍門」は琴の用材としての「桐」の名産地であるとするのが正しい。「旅人が対馬結石山の琴を贈つたのを、支那の龍門の名琴の如くに、尊び称して「龍門之恩」と言つたのである。即ち立派な琴を賜はる恩恵の意に外ならぬ。」という『私注』の説が最も肯綮にあたっている。いずれも儀礼上の文飾にすぎないと言つてしまえばそれまでだが、相手にものを贈る場合、それがいかに珍重すべきものであるかを特記するのは不思議なことではないし、それを受けた者がすばらしいものがありがとうと感謝するのも当然であろう。そういう意味で、旅人の書いた「対馬結石山孫枝」と房前の「龍門之恩」は打てば響くように照応しあっているのであるから、その点からも逆に「孫枝」の意味を推量しうるのはないだろうか。

七、結び

私は問題を拡げすぎて収束する手だてを失つたよう

ある。しかし、「梧桐日本琴一面^{（二）}山孫枝石」という一行の解釈にかなり新しい角度からの疑問を投げかけたつもりである。目下のところこれ以上の結論は出せないし、出さない方がよいと思われる。私としては、発掘された和琴の材質の検査がもっと進展してほしいと思われ、正倉院御物の和琴の材質にしても、「沢栗」という曖昧な表示ではない、厳密な吟味が必要であろうと考える。また、この「日本琴」の大きさであるが、八一〇番歌に「人の膝の上わが枕かむ」とあるところから、いかにも小型の優雅な和琴が空想されるので、本稿中にのべた天理市布留遺跡で発掘されたようなものを頭に描きつつ、これらの歌を味わってみたいとも思っている。

注1 『正倉院宝物』南倉(昭36・5、朝日新聞社)。同北倉(昭37・5、朝日新聞社)。

2 『正倉院御物図録』一一八(昭3・10)昭10・11、帝室博物館)

3 注1に同じ。

4 コトの材質調査ではないが、「昭和28〜30年正倉院御物材質調査」(『書陵部紀要』八号八昭32・3)に次のような記述がある。「木材(螺鈿紫檀琵琶の腹材—平山注)は沢栗となえられていたが、本邦に於てサワグリの異名をもつ植物にクスギ、アヤマ

いる。

キ、ホンバガシワ、ヤマシバカエデ、リヨウブ、アオダモなどがあり、これらのうちアオダモは一見本材と類似するから沢栗という従前の鑑定はアオダモを指すものと考えられる。しかしアオダモは放射組織も明らかにルーペで認められ、比重も〇・七五で本材とは明らかにことなる。」この項の筆者は小清水卓二博士である。

5 松田修『増訂万葉植物新考』(昭45・5、社会思想社)には諸説を挙げた末に、未詳としている。

6 東京都渋谷区駒場の元東京教育大学農学部(現、入試センター)の跡地には貴重な植物がいくつも残されているが、シナアブラギリ(トウダイグサ科)も三本現存している。

7 『玉台新詠集』巻九霜来悲落桐(沈約)にも、「悲落桐……本出龍門山……分取生孤(孤生)栢、徙置北堂陲……願作清廟琴……」とある。「栢」はひこばえである。

8 「又大かた箏をばひざの上に、龍角のあたる程にくべきなり。」(『体源鈔』)ともある。また、前橋市朝倉出土の埴輪(琴をひく男)へ古墳時代後期Vを見ると、全く両膝の上に板作りの和琴をのせて弾いている。「……単なる楽人ではなく、かなり身分の高い人であったと思われる。」と、『原色日本の美術』第一巻(昭45・1、小学館)の解説者は記して